

琉球大学学術リポジトリ

研究室紹介（県農業試験場名護支場果樹茶業研究室）

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017191

県農業試験場名護支場果樹茶業研究室

県農業試験場名護支場の前身は大正4年4月、名護村字東江に設置された県立農業試験場名護試験場である。果樹、茶業に関する試験研究の歴史は試験場設立当初にさかのぼる。果樹試験地の拡張と山地開発試験のため、昭和33年2月、今帰仁村字玉城に呉我山試験地が設置され、果樹係(温帯果樹、熱帯果樹)、パイナップルを置いて試験研究が行われた。組織改定により、昭和53年4月、果樹研究室が設置され、カンキツ、ビワ、マンゴー等の温帯果樹、熱帯果樹の研究が行われた。昭和58年4月呉我山試験地が廃止され、果樹研究室から熱帯果樹研究室が独立した。昭和62年4月、果樹育種研究室が新設され、温帯果樹の品種部門が独立した。同時に果樹研究室と茶業研究室が統合され、果樹茶業研究室となり現在に至っている。時代のニーズにより、本研究室は作目、分野別に細分化されたが、本県果樹研究の元祖的存在である。

平成2年に作成された沖縄県果樹農業振興計画書から温帯果樹類の現状を見ると、平成元年度のウンシュウミカン、タンカン、シークワサー、その他カンキツ類の栽培面積684ha、生産量7,132トンである。平成12年度目標としては、栽培面積670haは同程度であるが、生産量は12,900トンまで拡大の予定である。ビワ、スモモなどの温帯果樹類についても増産の計画である。しかし農産物の自由化、県外産地における施設栽培、極早生品種導入による高品質化および前進出荷、高温多雨、季節風、台風等の気象災害、病虫害等、本県の

温帯果樹類を取りまく環境はかなり厳しいものがある。沖縄産温帯果樹類の地位を安定的に確保するため、栽培技術の改善がぜひ必要である。優良品種への更新、品質向上、安定生産等本県独自の技術確立が、本研究室に課せられた責務であると考えている。

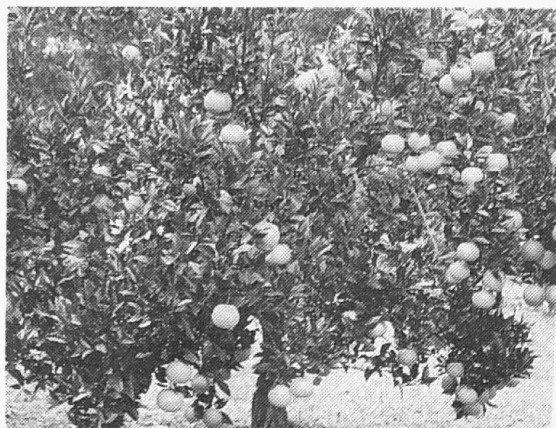
現在、研究室で取組んでいる試験研究課題は、(1)タンカンの着花結実の生態特性の解明、(2)タンカンの樹体管理法の開発、(3)タンカンの土壌管理、施肥法の開発、(4)タンカンの外観向上技術の開発である。この課題は平成6年度スタートした国の助成による地域重要課題、新規特産作物開発のための在来・未利用品種等の特性評価・保存、利用技術、中課題名「亜熱帯地域における特産果樹の高品質安定生産と商品化向上技術の開発」、の中で実施されるものである。本県におけるタンカン栽培の問題点は隔年結果と果実汚染である。従って、着花結実の生理生態的特性、樹体管理法、栄養生理等を解明し、外観の美しい果実を連年安定生産できる技術の確立が急務である。これまで摘果法(葉果比)、施肥法、剪定法等の試験で隔年結果防止対策を講じてきたが、十分解決するには至らなかった。今回、果樹栽培の基本である樹勢、樹体栄養面から開花結実の生理、生態について調査を行い、隔年結果性との関係を究明し、連年着果させる技術を一挙に確立するべく取組んでいる。

その他温帯果樹類の課題として、(5)早生ビワの大果・高品質果実生産技術の確立がある。この課題では生理

障害果、病害果、特にひび割れ果、炭そ病の発生防止試験を行っている。早生ウンシュウの課題では、(6)早生ウンシュウの品質向上及び早熟化技術の確立、が平成5年度に完了し一定の成果を収めたが、なお解決すべき問題も多く、新規課題で対応する準備を行っている。茶樹については、(7)茶樹の系統選抜及び夏茶の品質向上、(8)茶樹の更新サイクル技術の確立、の2課題がある。現在、本県の奨励品種として‘やぶきた’、‘ふかみどり’があるが、次期奨励品種候補として‘めいりよく’が選抜され、農家圃場で試験栽培を実施中である。

これまでの主な試験研究成果の中から沖縄県農林水産試験研究推進会議で認定され、普及に移した技術は以下の通りである。

昭和54年度、①タンカン‘垂水1号’（昭和50年度鹿児島県から導入）を沖縄県の推奨品種として選定した。昭和60年初頭から平成5年まで新植された系統はすべて垂水1号で、T123とともに本県タンカンの主流を成すものである。昭和60年度、②暖地向けビワ品種として‘茂木’を選定した。昭和63年度、③ビワの早生品種として‘長崎早生’を選定した。④ビワの摘房法として、30～40%程度の摘房を10月中旬～11月上旬（早生種は9月下旬～10月上旬）に行うことで品質、収量とも優良になることが明らかになった。⑤ビワの紫斑症が果実袋（ビワ2号袋）を使用することで防止できることがわかった。



タンカンの品種‘名護紅早生’

平成元年度、⑥タンカンの推奨品種候補としてT-19が認定された。⑦タンカンの整枝法として、開心自然形が商品化率、収量、品質とも優れていた。⑧早生ウンシュウの施肥法としては、秋肥（9月・10月）全量区より、また秋肥（70%）＋春肥（1月・2月30%）区より、秋肥（50%）＋夏肥（20%）区が増収することが明らかになった。

平成2年度、⑨タンカンを屋根かけ栽培（被覆期間は開花直前の3月中下旬～梅雨あけの6月中旬、裾は4mm目の防風網で囲む）することにより病虫害による被害が軽減され、外観が向上した。平成5年度、極早生ウンシュウ、早生ウンシュウを収穫直前の7月中旬から雨水が入らないように、多孔質資材でマルチすることにより、糖度が上昇した。また酸度も高く推移したが、灌水によって減酸でき品質が向上した。

平成元年、普及技術に移したタンカンT-19を平成3年‘名護紅早生’と命名、農林水産省への新品種登録を出願した。平成5年、種苗法による新品種登録が告示された。平成6年、約13,000本の苗木が農家に有償配布された。平成7年には年50,000本の苗木が供給され、栽培される計画である。



タンカンの品種‘名護紅早生’

当研究室のスタッフは研究職3名（果樹2名、茶樹1名）、農業技術補佐員の3名（果樹2名、茶樹1名）である。消費者の嗜好が少量多品目傾向にある昨今、カンキツ以外の温帯果樹類、特にビワ、スモモ、等の生産拡大をする必要がある。そのため、スタッフの増員と研究予算の増額も当面の緊急課題である。本土先進

地および台湾等の亜熱帯地域における温帯果樹類の栽培技術を参考にしつつ、本県独自のコンセプトを持った試験圃場の創造、栽培技術の改善のため室員一同、日夜まい進しているところである。

（金城秀安）